

動静脈奇形症例集 2

—顔面—

企画にあたって

動静脈奇形は治療に難渋する疾患の代表の1つです。形成外科医として診療していると、必ず数年に1症例は治療する機会があることでしょう。しかし、発症頻度が高い疾患ではないため、形成外科医をはじめどの科の医師もその扱いに苦悩することになります。出血する、治癒させることが難しく再発する、放置すれば周辺組織を破壊する、治療しても周囲を含めた組織欠損を生じるなど、患者と治療者の悩みはつきません。まとまった数の治療経験をもっている専門家や施設は限られているため、各施設で治療している症例の情報をより多くの専門家同士で共有する場が必要と考えました。

本特集では、その第2弾として「顔面の動静脈奇形の症例」を集めました。ある人のことを思う時、皆誰でもその人の顔や表情を思い浮かべることでしょう。声をイメージすることはあるかもしれませんが、身体のほかの部位でその人を覚えていくことはあまりないでしょう。顔はその人のアイデンティティです。見る、話す、食べる、息をする、どれも楽しく生きるための基本となる、顔の重要な機能です。アイデンティティと機能を保ちながら難治な動静脈奇形と対峙するのは、困難を極めます。

顔面の動静脈奇形を診療している全国の各施設から、良い経過をたどっている症例ばかりでなく、難渋している症例についてもご提示いただきました。さまざまな治療の選択肢が記述されています。どれも顔の動静脈奇形に悩まされている患者さんとその治療者の、QOL向上のための苦闘が記されています。一施設一専門家の経験を多くの読者と共有し蓄積していくことで、次の突破口を開くヒントにしていきたいと思えます。

信州大学形成外科 杠 俊介